

岐阜県支部だより

- 巻頭言
- 支部研修会報告
 - ・第3回研修会
 - ・第4回研修会
 - ・第5回研修会
- お薦め本紹介

巻頭言 スクールカウンセラーとして

日本学校教育相談学会 岐阜県支部理事 岐阜県スクールカウンセラー 幸脇弥生

私は、教職を退職後、2019年に公認心理師の資格を取り2020年から岐阜県のスクールカウンセラーとして働いています。教員として在職していた学校では、生徒の人間関係や不登校など、様々な問題が発生していました。その時には、支援が必要な生徒にじっくり寄りそって、教育相談をする余裕がほとんどありませんでした。生徒と懇談をしても、進路指導と学習のことが中心だったような記憶がします。生徒と私の間には実力テストの結果票が並べられ、今思えば、生徒の話を聴くというよりは、自分の話を聞かせる指導が多かったようでした。

そこで、これからは生徒の話を聴くことで役に立ちたいと思い、公認心理師の資格を取りました。現在は3つの中学校と学区の6小学校を担当しています。

主な仕事は、生徒との面談のほか、保護者との面談や、心の教育に関する授業を行っています。また、支援の必要な生徒の学習の様子を観察することもあります。

授業では「SOSの伝え方に関する授業」や「人間関係を円滑にするためのエクササイズ」などを行っています。授業には、構成的グループエンカウンター(SGE)を取り入れたりソーシャルスキルを高めたりする内容も取り入れています。

新年度当初は、学校の職員室の雰囲気も視野に入れました。特に初任の先生や転勤した先生が元気に仕事をされているかも、職員室の空気を感じていました。学校によっては新任の先生との面談が組まれているところもありましたが、すべてではありません。したがって、スクールカウンセラー(SC)の机が職員室に位置付けられていることは大変重要なことです。

相談室の有無も重要です。残念なことに、すべての小中学校に相談室があるわけではありません。会議室や保健室、放送室や校長室、コンピュータ室が相談に使われることもあります。生徒が相談しやすい環境構成はとても重要ですが、「部屋がない」という理由からか、なかなか思うようにいかないことがわかりました。これを読んでいただいている先生の勤務先ではどうでしょうか。

初対面の生徒の前で授業をするということは、かなり緊張します。1時間の中で、生徒の関心を引き授業展開することは大変ですが、それが自分自身の授業スキルを高めることにもなりました。

この仕事をしていてうれしかったことは、生徒と相談した後「ここで話せてよかった」「聞いてもらってありがとう」と言われることです。または保護者に「うちの子どもには〇〇という方法で、やってみます。こんな方法もあったのですね。」と言われることです。

子供たちは仲間同士でゲームの話はしても、自分のことを語ることは苦手な子が多いようです。特に思春期になると、周りに気遣い、自己主張さえも遠慮する仲間関係があります。ストレスを抱えている子どもに、少しでもその状況を改善してやりたいと考えています。

私はガイダンスカウンセラーの資格をもちますが、教育相談学会に入り事例検討会やエンカウンター研修を続けたことが今の仕事の素地となっています。特に、事例検討会は学会メンバーの様々な立場の方から、広い視野にわたって知見を得ることができました。生徒の見方やとらえ方は、教えられることが多く大変勉強になりました。このような研修の機会をこれからも大切にしつつ、仕事を続けていきたいと思えます。

☆ 支部研修会報告 ☆

◇ 第3回研修会

開催日：令和2年10月24日(土)

会場：西濃学園

◎理事長挨拶

「やっと動き出せる。」…昨年度岐阜県支部では、コロナ禍の影響により、第1・2回研修会が中止、全国大会が1年延期に、そしてこの第3回研修会が、初の試みとして対面とオンラインによるハイブリッド型研修として、西濃学園（宿泊型の中学校・技能連携校[高校]）を訪問し開催できたことをお話になりました。

今私たちに求められていることは何かを考え、今後の研修に活かしていくのと同時に、不登校特例校である西濃学園について学ぶ中で、今の自分たちの環境・立場で活かせることは何かを学ぶ機会にしたいと参会者に呼びかけられました。

◎講演会

「西濃学園での生活」

西濃学園副学園長・西濃学園中学校長
岐阜県支部副理事長

平林 克友 先生



講演会は、2019年度より西濃学園久瀬校となった旧久瀬小学校校舎で行われました。

平林先生は西濃学園に勤務する前、適応教室において教育相談を担当しており、家庭訪問をしたり生徒と共に登校をしたりする中で、生徒を学校へ戻すご苦労を味わわれたそうです。そのご経験が、今の先生のお仕事につながっているのだと、伺い知ることができました。

転校が7割の西濃学園では、年間で150件程の

問い合わせがあるそうです。入学希望の生徒に、学園見学→相談→体験入学を行っていて、学園見学は、入学前提でなくても受け入れてもらえるそうです。見学後、学園生活が大変だと感じて学校に復帰した生徒もいたそうで、それも学園の役割だとお話しされました。

「全く登校していない生徒が寮生活できるのはなぜか。」という問いかけに、『生徒自身が気持ちの整理ができていっているかどうか』が大切だとお話しされました。学園生活では、それまでの人間関係（しがらみ）がない上、少人数ということも、1から始めることができる利点だと感じました。

寮生活では、生活管理スキルを育てているとお話しされました。午前7時に起床。自主的に校舎を清掃したり、生徒間同士で起床を促し合ったりする姿もあるそうです。午前7時30分、食堂にて朝食をします。



授業は、午前8時40分から午後3時まで（中学校・高校でやや異なる）。規則正しい生活習慣と毎日の授業に出席する大切さについて、日々の生徒との相談を重ね、考えておられます。生徒は、欠席や欠課の意識をもち、自分から動き始めるのだそうです。授業後は、部活動や自由時間として過ごしたり、携帯電話やゲームも自由に使えたりできるそうです。

午後6時夕食後、近くの温泉へ入浴。温泉での密を避けるため、学園と温泉とを数回往復していらっしやるのだそうです。ただ、温泉入浴は、生徒たちにとって癒しの場であり、公共のマナーについて考える場でもあり、また地域の方々との交流の場でもあることから、先生方はこの入浴を大切にしていっしやるのが分かりました。

時間	宿直A	宿直B	宿直C	日勤
16:00				
16:10	温泉引率(女子)		温泉引率(女子)	温泉引率(日)
16:40		温泉引率(日)		
16:45				
17:10				
17:25			温泉引率(女子)	
17:30	夕食・洗濯			夕食・洗濯
17:40	夕食・洗濯			夕食・洗濯
17:50	夕食・洗濯			夕食・洗濯
18:10	夕食・洗濯			温泉引率(日)
18:35	夕食・洗濯			
18:55	夕食・洗濯			
19:10	温泉引率(日・日)		温泉引率(女子)	温泉引率(日)
19:55				
20:00				

↑宿直3名と日勤1名で温泉引率を分担しているそうです(水色の部分が温泉引率)。

午後10時50分、携帯電話やゲームを回収していることから、集団生活のルールやマナーを学ぶ場になっていると感じました。

西濃学園中学校では、学習指導要領に示された内容を基本としながらも、独自教材を取り入れながら、基礎学力の定着に重点を置いているとのこと。例えば、「リカバリー」という授業では、中学1年生では国語や算数を、中学2年生では中1+英語を、中学3年生では3教科を学ぶのだそうです。また、ライフプランニング(SST)や地域学習(地域の方と学ぶ)という特色ある学びに、私は魅力を感じました。

教員の勤務体制は、日勤・宿直・早番の3交代だそうです。食事や入浴を通して、教師としての立場だけでなく、先生自身を生徒たちに見せていくことになります。きっと先生方は、お父さん・

お母さん・お兄さん・お姉さんという役割も果たしていっしやるのだと感じました。

卒業生の追跡調査についても触れられ、8割は社会人として生活している一方、挫折者が2割あるとのことでした。自分から社会に適応する力が必要であるとお話しされました。

今年度、公立の不登校特例校である草潤中学校が岐阜市で開校になりました。草潤中学校との共生、また生徒や保護者に希望をもってもらえるような学校のあり方を考えていきたいと、講演会を締めくくられました。

岐阜県支部理事長 古田信宏先生が、講演のお礼でお話しになりました。その中で一番印象に残ったものが、「独自の教育課程」でした。それが必要な生徒はどこにでもいるのではないかと、私もそのように感じました。今の立場でできることが何か、私もそれを考えていきたいと思った講演会でした。

◎学校見学会

場所を西濃学園中学校藤橋校舎に移し、学校を見学させていただきました。校舎の中にも生徒の部屋があり、一人当たりの部屋の広さは4畳半程。掃除や洗濯は自分で行うそうです。

談話室・憩いの間があり、予約をして利用することができるとのことでした。

廊下には、お店を訪問して生徒たち自身の生活に活かすポスターや、コロナ対応での教師や生徒一人一人のタイムスケジュールが掲示されていました。



学園の1年の掲示では、自然体験や地域の方・坂内中学校との交流、社会見学などの行事を知ることができ、大自然や人間関係を大切にしたい学び

を大切にしていることが分かりました。



また、実際に生活している場にお邪魔したのですが、生徒たちの生き生きした表情が大変印象に残りました。自分の居場所があるからこそ、また人とのつながりを実感しているからこそその表情なのだと感じることができた見学会になりました。(文責 関戸 美枝子)

◇ 第4回研修会

開催日：令和2年12月12日(土)

会場：岐阜市南部コミュニティーセンター
+オンライン研修

◎全体会

今回の研修会は、前回に引き続きハイブリッド型研修に加えて、オンライン参加者ともやりとりを行うテストケースとしての研修会になりました。学校が再開されて時間が経過しましたが、生徒や教師の不安が変わっている訳ではありません。また、不登校や暴力のデータは深刻です。教育相談学会にできること…例えば事例検討会のあり方や今後へつながる研修にしていくことを考えていくことを確認しました。

また、第3回研修会（西濃学園での講演会と見学会）から、学園の生徒たちの様子や校内を見学させていただき、実際にその場所を訪れたからこ

そ分かることがあったことを再認識しました。

◎事例検討会

「学校に行く意欲が乏しいと感じられる」
小学生 (小学校講師)

コロナ禍における生活習慣の乱れから不登校になった、小学3年生女兒についての検討を行いました。流れとしては①担任と該当児童との関わり方、②今後の児童理解、③関係機関との連携の取り方の3つについて検討していく形でした。まず担任の先生から、女兒の家族構成や仲間との関わり方について授業での姿、不登校になってからの家庭生活についてお話しいただきました。

参加された先生方からは、2年生までの学校での様子や家族関係、学力、学校での仲間関係など、多数の質問が寄せられました。それらの質問から、2年生では欠席はそれほど多くなかったが、冬からよく休むようになったことや、祖母との関係が不登校をきっかけに悪くなったこと（祖母は女兒に学校に行ってほしいという思いが強い）、母親は朝から晩まで働きに出ており、女兒の不登校についての困り感はないこと、学習面では計算の力が低い、ゲームのキャラクター名はたくさん覚えているなどのこだわりがあることが分かってきました。

その上で、①担任と児童との関わり方としては、現在の女兒との関係を今後も続けていきながら、できる時もできない時も支えて褒め続けることを大切にしていけることを提案されました。②今後の児童理解では、勉強が好きではなさそうな女兒が得意なことを見つけ、それを伸ばしていくこと、女兒本人が困り感を実感することで、今後必要なことは何かという明確な目標を設定できるので

はないかと教えていただきました。③関係機関との連携の取り方では、ケース会を通して、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとつながるきっかけがあることや、養護教諭からつないでいってもらうことについても教えていただきました。

事例提供をしてくださった先生と事例検討会に参加された先生方とのやりとりを通して、数々の生活習慣はできているものの、生活リズムが整わなくなり、頑張りたい気持ちがあっても不安定でできない女兒の心が見えてきた気がしました。安心できる場所を確保し、母親と協力しながら支え続けることの大切さを学ぶ会となりました。

(文責：関戸 美枝子)

◇ 第5回研修会

開催日：令和3年2月20日(土)

※オンライン研修

◎事例検討会

「特別な支援を必要とする児童の
居場所づくり
—特別支援学級の実践—」
(小学校教諭)

今回の研修会は、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が発出された中で行われました。そのため、オンラインのみの研修となりました。

今回は、特別支援学級担任からの事例提供で、6名の在籍生徒のうちの3名についての実践を提供していただきました。

一人目は、以前学校外へ飛び出して行ったり、備品を持ち出したりする2年生男児Aさん。二人目は、以前パニックにより自傷行為を行っていた1

年生男児Bさん。三人目は、以前双方向のコミュニケーションが難しかった4年生男児Cさん。その3名について、①実態把握と支援のポイント、②保護者や教職員、関係機関との連携、の2点を中心に行われました。事例提供してくださった先生から、その3名の児童に関わって概要を説明していただき、参加された先生方からの質問により、具体的な姿が明らかになってきました。また、異なる障がい(知的と情緒)の児童が同一の学級に在籍していること、担任の他に支援員1名で学級を運営していらっしゃることなど、生徒を指導していく上での大変さも伝わってきました。

①実態把握と支援のポイントについては、次のことを教えていただきました。まず、学級から飛び出す児童については、注目してもらいたいという思いをもっており、追いかけることが逆効果になることもあるそうです。家庭環境を鑑みて対応を考える必要があるということが前提にありますが、例えば教師に甘えることができる時間が確保されることで落ち着く場合もあるそうです。

また、本事例だけに限らず、様々な行動の裏側には、「そうしてしまう(せざるを得ない)」ことがあり、背景にある要因や多面的に捉えて仮説を立てることが大切であるとのことから、児童の特性と環境の支援が必要になってくるのだそうです。つまり、障がいがある本人たちへの支援と、本人たちとその周りが安心して過ごせることが必要であると考えられます。例えば、AさんやBさんが落ち着ける部屋にするためにパーテーションを設置することです。そうすることでAさんやBさんも落ち着くことができるのと同時に、周りも落ち着くことができるということです。

また、できない原因からできるようになるため

の方法を考えることが大切になってくるのだそうです。「どうすればできるだろうか。やりやすくなるだろうか。」ということや、「今、どこまでできていて、次に何を目標せよいだろうか。」というように、現状を把握した上で長期目標と短期目標を設定することが大切なのだと教えていただきました。

そのためには、好きなことや得意なことなどの本人の強みを教師が見つけ、それを生かし学習に結び付けることができるのではないかとということです。例えばCさんは物語が好きだということから、物語の中で取り組めるドリルを学習に取り入れてみてはどうかという提案をいただきました。

②保護者や教職員、関係機関との連携に関わっては、次のことを教えていただきました。保護者との連携については、成長の様子をこまめに伝えていくということです。保護者の立場で考えた時、自分の知らない成長を見ていてくれる、認めてくれる人がいることは、きっと心の支えになるのではないかと思います。

教職員との連携については、支援検討委員会を開催したり、打ち合わせで児童交流したり、放課後などに他の先生方と雑談したりする中で、担任だけで抱えこむのではなく、「全職員で子どもを育てる役割分担」を教えていただきました。

また、関係機関との連携については、発達検査や発達相談など、相談機関や医療機関とのつながりをもつことを教えていただきました。

以上のことから、実態把握をして、要因を分析し、支援の目標と手立てを考えることの大切さを学ぶことができました。

また、教師と子どもたちとの関わりとともに、

子ども同士の関わりを考えていくこと、学級としての方向性をもっていけば、主体的に子どもたちが動くということについても考えるきっかけをいただいた事例検討会になりました。

(文責：関戸 美枝子)

☆ 広報企画 ～お薦め本紹介～① ☆

日本学校教育相談学会

岐阜県支部理事長 古田信宏先生推薦

最近読んだ本の中で、正しくあつという間に読み切り、読後も妙に心に残った1冊を紹介します。

『パパが貴族 僕ともーちゃんのヒミツの日々』

著者；山田ルイ 53 世

出版社；双葉社

発行日；2020年10月25日

価格；本体 1400 円＋税

著者である山田ルイ 53 世は、漫才師「髭男爵」の髭を蓄えシルクハットをかぶった貫禄のあるおじさん。10 年ほど前、ワイングラスを片手に「〇〇やないかい！」と突っ込みを入れたり、訳もなく「ルネッサンス！」とグラスを傾けたりして有名になりました。しかし、それが人気の絶頂だったといういわゆる「一発屋」です。古田がこの本に興味を持ったのは、著者であるこの山田ルイ 53 世が数年前、朝日新聞の子育て特集の記事の中で不登校、引きこもり経験者であったと語っていたことによります。不登校経験者であっても社会的な自己実現に至り、自分の家族を作って子育てをしていく様子が、漫才師らしくユーモアあふれる明るい語り口で綴られています。屈託のない子どもの成長・発達ぶりが、正体を知られたくない父親の苦悩や喜び、成長と共に読み取れます。

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第 26 号

2021 年（令和 3 年）5 月 30 日発行

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集：日本学校相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ：<http://jascg-gifu.net/>